自傷行為への遭遇体験に関する調査研究

谷秀次郎¹・高橋あすみ¹・田中大輔¹・青木佐奈枝²

(¹筑波大学大学院人間総合科学研究科・²筑波大学)

キーワード：自傷行為, 遭遇体験, BDI-II

The study of encountering the person with self-mutilation

Shujiro TANI¹, Asumi TAKAHASHI¹, Daisuke TANAKA¹, Sanae AOKI²

(¹Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba・²University of Tsukuba)

Key Words: self-mutilation, encountering, BDI-II

目 的

近年、臨床群のみならず一般学生にも自傷行為が増加しており、一般学生の 3～20%程度に一度以上の自傷行為が認められていることが指摘されている(山口ら, 2004; 松本・山口, 2005; 岡田, 2005; Izutsu et al, 2006; 伊尻, 2009; 濱口ら, 2009; 岡田ら, 2010 ほか)。また、「自傷したい」「リストカットした」など自傷行為を直接あるいは SNS 等を通して間接的に他者から告白される体験は、インターネット普及後、青年期を中心に増加しているものと考えられる。しかし、実際はいかほど起きており、告白を受けた者・告白した者にどのような影響を及ぼしているのであろうか。

本研究では自傷行為に関する被告白体験、遭遇体験の実態調査を行うとともに、その体験が青少年の精神的健康に与える影響について検討を行う。

方 法

調査協力者 関東圏内の大学生 313 名 (男性 145 名、女性 166 名、不明 2 名、平均年齢 20.53±2.28 歳)

調査内容 自傷行為が身近に起きるかどうか(「1:まったく身近に生じない」～「4:非常に身近に生じる」の 4 件法)、知人での自傷行為者の有無(「はい」「いいえ」)、自傷行為者の内訳(家族・親族、友人、恋人、顔見知り・さほど親しくない知人、その他)、知人の自傷行為を知った経路(直接、メール、ツイッター・ブログ、第三者、うわさ、現場に居合わせた、傷を見た、その他)を尋ねた。自傷行為を知った時の苦悩度(「0:まったく苦痛がない」～「10:最大の苦痛」)および困惑度(「0:まったく困らない」～「10:最大の困惑」)についてそれぞれ SUD (Wolpe, 1958) による 11 件法で尋ねた。抑うつつの指標として BDI-II (Beck, 1996) を用いた。

結 果

1) 自傷行為の身近さ

「比較的身近に生じる」が 61 名、「非常に身近に生じる」が 12 名で計 73 名 (23%) が自殺を身近に感じると回答した。

2) 自傷行為者への遭遇体験 (複数回答あり)

知り合いに自傷行為者がいると回答した人は 141 名 (45.0%) であった。知り合いの自傷行為者の内訳は、「友人」が 98 名 (69.5%) と最も多く、次いで「顔見知り」46 名 (32.6%)、「恋人」10 名 (7.1%)、「家族」8 名 (5.6%) であった。また、複数の知り合いが自傷行為をしている複数遭遇者も 28 名 (19.9%) いた。さらに、知人の自傷行為を知った情報経路は、「実際に傷を見た」(81 件、57.4%) が最も多く、次いで「本人から直接、告白・相談を受けた」(65 件、46.1%)、「第三者から聞いた」(39 件、27.7%) が多かった。自傷行為を知った情報経路が複数の者は 78 名 (55.3%) であった。また、「現場に居合わせた」など自傷現場への遭遇も 11 件 (7.8%) あった。

3) 知人の自傷行為を知った時の苦悩度・困惑度・抑うつ感

自傷行為への遭遇体験のある者(遭遇群・実体験群)とない者(非遭遇群・想定群)で自傷行為遭遇時の心理状態を比較したところ、苦悩度 ($t(265.81)=3.39, p<.01$)、困惑度 ($t(278.13)=5.38, p<.01$) で非遭遇群が遭遇群と比較して有意に得点が高かった。つまり、実際の遭遇体験による苦悩・困惑度よりも、遭遇体験を想定した際の方が苦悩・困惑度を強く感じる事が示された。一方、抑うつ総得点、抑うつつの認知側面について有意差はなかったが、抑うつつの身体・感情因子得点は遭遇群の方が有意に高かった ($t(296)=2.02, p<.05$)。つまり、抑うつつの認識はないが身体・情動面に抑うつつの影響が生じていることが示された (表 1 参照)。

表 1 自傷遭遇・非遭遇体験の苦悩度・困惑度・抑うつつの t 検定結果

	自傷遭遇体験	N	平均	SD	t(df)
苦悩度合	あり	141	5.46	2.51	3.39 **
	なし	161	6.38	1.98	(265.81)
困惑度合	あり	141	5.84	2.37	5.38 **
	なし	162	7.21	2.04	(278.14)
抑うつ身体的・感情的要素	あり	134	5.84	4.26	2.02 *
	なし	164	4.82	4.38	(296)
抑うつ認知的要素	あり	134	5.46	4.71	0.55
	なし	168	5.16	4.7	(300)
抑うつ合計	あり	131	11.3	8.28	1.39
	なし	164	9.93	8.27	(293)

** $p<.01$, * $p<.05$

考 察

結果から、大学生の約半数が自傷行為をした者と遭遇した体験があること、そのうち約 8% は自傷行為の現場に居合わせたことが明らかになった。自傷遭遇体験のある者のうち、約 7 割は友人の自傷行為と遭遇しており、家族や恋人も含めると、非常に近い者の自傷行為に遭遇した体験は大多数に及ぶことが推測された。また、自傷行為を知った経路について、自傷行為による傷を実際に見たり、自傷行為者本人からの直接の告白や相談を受けたり、といった直接的な遭遇が半数以上を占めていた。このような現実にあいながらも、自傷行為を身近なものと感じている者が全体の 4 分の 1 以下であったことは興味深い。実際に遭遇しながら自分とはかけ離れた体験として受け止めている可能性がある。

また、自傷遭遇体験がなく、想定して回答した者の方が実際に体験した者よりも、自傷に遭遇した際の苦悩や困惑が高いと回答した。その一方で、自傷行為に実際遭遇した者は、認知的には抑うつ感、つまり自覚的な抑うつは有意に高くはないものの、身体や感情面においては有意に抑うつが高いことが示された。自傷のインパクトが自覚されにくい点も推測されるが、この点については更なる検討が必要と言えよう。